

~~~~~  
 研 究  
 ~~~~~

## 中学生との交流が幼児の遊び行動に与える影響

松村京子<sup>1)</sup>

### 〔論文要旨〕

中学生との交流学習が幼児にとってどのような意味をもつのかを調べるために、交流時と通常時について、幼児の遊びの様子を観察し、ビデオ録画した。録画した遊び場面について、比較・分析を行った。その結果、以下のことが明らかになった。①遊びは、「感覚」、「機能」、「模倣」、「受容」、「構成」、「接触」、および「その他」に分類され、交流時には「機能」、「接触」遊びが、通常時には「構成」遊びが多くみられた。②交流時には通常時に比べて玩具などのモノを使わない遊びが多くみられ、さらに、幼児の喜び表情の表出が多くみられた。③喜び表情の表出が多くみられたのは、交流時では「機能」、「接触」遊びであり、通常時では「模倣」、「構成」遊びであった。

**Key words:** 交流学習, 遊び, 幼児, 中学生, 接触遊び

### I. 背景と目的

近年、中学生や高校生に乳幼児と関わる経験をもたせるための交流学習が盛んに行われるようになってきている。筆者らは、中学・高校生がどのように乳幼児と関わるのか、対児行動の分析を行ってきた<sup>1)~4)</sup>。そして、乳幼児に対してネガティブな感情をもち、学習開始時には幼児と関わらなかった生徒も、体験学習時間の経過にともなって幼児と関わっている保育士や友人をモデルとして学習し、養護的行動を出現させてくることなどを明らかにした<sup>5)</sup>。中学・高校生は親や友人とは異なる幼児を相手とすることで、相手の要求していることや感情を知ろうとし、それに合わせて行動しようとする。このような体験は、生徒の養護性の発達を促すことにつながり、また社会的スキルを訓練する場としても、大変重要な役割を担っているといえる<sup>5)</sup>。

このように中学・高校生と幼児の交流は年長

者である中学・高校生の養護的行動を引き出し、対児感情を好転させることが報告されている<sup>6)7)</sup>。では、年少者である幼児にはどのような影響が及ぶのであろうか。これについての実証的な報告は見られない。一般に、幼児に異年齢のさまざまな人と関わる経験をさせることは幼児の社会性を促すと考えられている。異年齢の集団の中で遊ぶことによって、子どもは年上の子、年下の子との関係のあり方を学び、媚びること、威張ること、優しくすること、咎めること、約束を守ることなど、人との関わり方に関するさまざまなことを体験し、身につける。これは多くの大人が経験してきたことであり、また社会のうちにも暗黙のルールのように存在してきたものであろう。子どもは遊びの中で、対人関係の能力、感情のコントロールの能力、攻撃性をコントロールする能力などを発達させる。

しかし、今日子どもたちを取り巻く環境は変化している。少子化の進行にともなうきょう

Effects of the Participation of Junior High School Students on the Play Behavior of  
 Preschool Children

[1613]

Kyoko IMAI-MATSUMURA

受付 04. 2.18

1) 兵庫教育大学(研究職)

採用 05. 1.25

別刷請求先: 松村京子 兵庫教育大学生活・健康系教育講座 〒673-1494兵庫県加東郡社町下久米942-1

Tel/Fax: 0795-44-2192

だい数の減少や、交通事故・誘拐の危険が増して安心して遊べる場所が少なくなったことや居住環境の変化によって、子どもの戸外遊びの機会が得にくくなっており、異年齢集団で交流する機会も減っている<sup>8)</sup>。したがって、かつては異年齢集団の中で自然に育まれていた社会的スキルを身につける機会も減少しているといえる。そして、対人関係の未熟さは、現在問題になっているいじめや不登校、学級崩壊、集団暴力などにも通じるものである。そのような状況下において、中学生と幼児との交流は、両者ともに多様な対人関係を体験する貴重な機会となり、社会性の発達につながるものと考えられる。

では、実際にどのような交流が行われているのであろうか。中学生が加わることによって幼児の行動はどのように変化するのであろうか。中学生が参加した遊びは通常時の同年齢集団の遊びと異なるのであろうか。あるいは、遊びには違いはなくその遊びの中での行動が異なるのであろうか。そのような実態についての報告はまだ見られない。そこで本研究では、幼児と中学生との交流場面で、中学生が幼児の遊びに加わることによって幼児の遊びが変化するか否か、変化するのであればどのように変化するかについて明らかにすることを目的に研究を行った。

## II. 対象と方法

### 1. 観察対象

神戸市立U保育所およびS保育所において、3～6歳児を観察対象とした。両保育所は0歳児から5歳児までのクラスがあり、U保育所は12クラス、S保育所は11クラスである。3歳児、4歳児、5歳児は、両保育所ともに各1クラス(約20名)である。

### 2. 中学生との交流時の遊びの観察

2000年12月、神戸市立S中学校3年生が対象児との交流学習を行った。交流学習の期間は2日間、時間は午前8時20分から午後4時30分までである。U保育所には生徒12名(男子5名、女子7名)、S保育所には生徒11名(男子4名・女子7名)が訪問した。各生徒が入ったクラスの幼児は約20名であった。交流学習は、保育所

の1日の予定にあわせて行われ、生徒が関わる幼児・関わり方・場所などは指定しなかった。

2つの保育所それぞれに観察者2名が入り、教室または園庭での自由遊び場面において幼児と中学生と一緒に遊んでいる様子をランダムにデジタルビデオカメラで撮影した。その際、ズーム機能を用いて、遊びに直接関与しない位置で、2名の観察者が同時に同じ場面を撮影しないようにした。交流学習は2日間、同じ生徒が同じクラスの配属であったため、2日間の交流学習のうち初日のみを分析対象とした。観察時間帯は9時から16時である。

### 3. 通常時の遊びの観察

2001年2月、上記の2つの保育所において特別な行事がない日に、同じ観察者、同じ時間帯、同じ方法で、幼児が遊んでいる様子をデジタルビデオカメラで撮影した。

### 4. 幼児の行動の分析

録画した行動場面の映像をコンピュータに入力し、一つの遊びの開始(遊びの途中である場合、撮影の開始)から終了までを1エピソードとして区切り(これを遊びエピソードとする)、動画ファイルを作成した。コンピュータ上で各動画ファイルを何度も再生して幼児の行動を観察し、遊びエピソードごとに遊びの継続時間・状況説明・観察者の所見を記入したシートの作成を行った。交流時の全エピソード数は126、通常時の全エピソード数は81であった。また、通常時には保育士を含んだ遊びエピソードが6例含まれていた。遊びエピソードの持続時間は交流時68.6±72.4秒、通常時77.8±70.0秒であった。

次に、交流学習時と通常時の遊びエピソードの各動画ファイルを再生し、1) 遊びの種類、2) 遊びの中でのモノの使用の有無、3) 遊びの中での幼児の喜び表情の有無を分析の視点としてカテゴリ分析を行った。なお遊びエピソードの開始と終了については撮影者2名、行動および表情のカテゴリ分析については撮影者2名と他1名の計3名で行った。コンピュータ上で各エピソードの動画ファイルを繰り返し再生した。その際、動画を静止させたり、ゆっくり動

かしたり、逆に戻したりして詳細に観察した。判断が困難な場面については判別者3名が協議し、カテゴリーの再確認を行いながら判別を進めた。

遊びの分類は、山下俊郎<sup>9)</sup>による、①感覚的な遊び(感覚器官を使うことを中心にした遊び)、②機能的な遊び(手足や身体を動かすことによって楽しむ遊び)、③仮想的な遊び(模倣的な遊びともいわれ、いわゆるごっこ遊びなどの身近生活を模倣し、想像力を働かせる遊び)、④受容的な遊び(身体的活動が比較的少なく、どちらかといえば外界からの働きかけを受け入れることを楽しむ遊び)、⑤構成的な遊び(ものを組み立てたり、つくり出したりする過程や、その結果を楽しむ遊び)、に分類した。そして、山下<sup>9)</sup>の分類にはなかったが、交流学習時に多く見られた、体に触れる遊び(接触遊び)を加えて6つに分類し、いずれにも分類されないものを、⑦その他とした。

また、中学生との関わりを楽しみと感じているか否かについて検討を行った。具体的には、遊びの中で幼児が喜びの表情(笑顔、快の感情を出していると思われるもの)を表出しているかどうかに着目し、分析を行った。

### Ⅲ. 結 果

#### 1. 交流時と通常時の遊びの違い

交流時の中学生と幼児の遊びと、通常時の幼児同士・幼児だけの遊びの分類を行ったところ、『感覚遊び』『機能遊び』『模倣遊び』『受容遊び』『構成遊び』『接触遊び』が見られた(図1)。通常時には『構成遊び』が多く、交流時には『機能遊び』『接触遊び』が多く見られた。

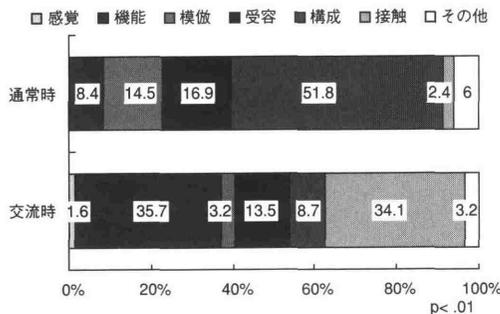


図1 通常時と交流時の遊びの違い

#### 2. 遊びの中でのモノの有無

遊びの中でモノが使われているかどうかの比較を行ったところ、通常時では、ほとんどの遊びにおいてモノが使われていたが、交流時ではモノを使わない遊びも多く見られた(図2)。

#### 3. 幼児の喜び表情の表出

遊びの中で、幼児が喜びの表情を表出しているかどうかを調べたところ、通常時に比べ、交流時では幼児の喜び表情の表出が多く見られた(図3)。

次に、喜び表情表出時の遊びの分類を行ったところ、通常時では『構成遊び』『模倣遊び』、交流時には『機能遊び』『接触遊び』が多いことがわかった(図4)。

### Ⅳ. 考 察

#### 1. 遊びの多様化

本研究結果から、中学生との交流時には通常

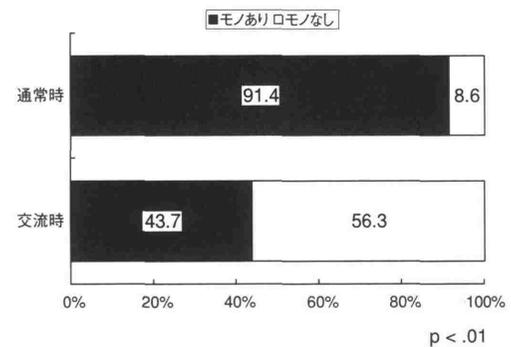


図2 遊びの中でのモノの有無

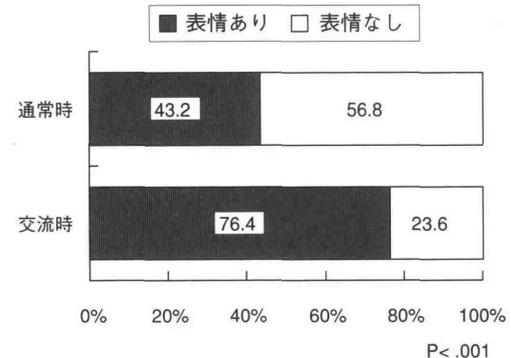


図3 喜び表情の表出

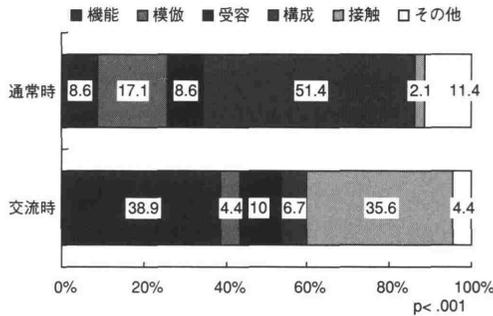


図4 喜び表情表出時の遊び

時にあまり見られなかった『機能遊び』と『接触遊び』が多く見られた。具体的には、中学生の背中に幼児が乗る、中学生に毛布をかける、背中に乗りかかり、中学生が振り向くと同時に同じ方向に動いて隠れる、おんぶ、だっこ、肩車などである。それは、中学生という存在があっではじめて成立する種類のものである。つまり『機能遊び』、『接触遊び』などの身体を使う遊び、遊び相手の身体が自分より大きいことで可能になる遊びである。また、身体を使う遊びが多いということは通常時と比較して遊具などのモノを使用しない遊びが多く見られたことからもうかがえる。

このように中学生が加わることで、幼児は通常できない遊びが可能になり、遊びが多様化しているといえる。

2. 接触遊びの意義

交流時の遊びでは『接触遊び』が多く見られたが、これは愛着行動の一つである。十分な身体接触と愛情を与えられ、情緒的欲求を満たされた乳児は、愛情豊かな人間に成長するといわれる。ボウルビー<sup>10)~12)</sup>は、鳥の雛と同様、人間の乳児もまた、他個体との関係を築き維持しようとする行動傾向を生得的にそなえており、それによって自らの適応や生存可能性をなんらかの形で高めていると仮定した。ハーロー<sup>13)</sup>の子ザルを扱った一連の実験も、接触によって慰めと安心感を与える存在に絶えず接触していることが栄養摂取とは全く別の意味で重要であることを示している。

遊具を媒介しない遊びを「ことば・歌遊び」と、身体を使って創り出される「からだ遊び」

に分類した場合、母親は、このどちらかに偏ることはないが、父親には「からだ遊び」の方を好む傾向があったという<sup>14)</sup>。本研究結果から、幼児にとって普段体験できないような、危険だがスリルがあって面白い遊び、特に身体・運動機能を使った「からだ遊び」を体験させてくれる存在として幼児が中学生を捉えていることがわかる。幼児は通常の集団生活の中で、あるいは家庭で十分に味わうことができない「からだ遊び」を楽しみ、また指導的立場にある保育士に対しては表出できない「からだ遊び」への欲求を中学生に対しては素直に表出していたことがうかがえる。また、愛着行動という観点からこの遊びを眺めてみると、中学生が幼児に対して感受性を持ち、侵襲的でない存在であるということ幼児が感じ取ったからこそ、素直に欲求を表出し、中学生を相互作用に巻き込んだといえる。

ヒューマンエソロジストのアイブル・アイベスフェルト<sup>15)</sup>は、「なでる、軽くたたく、軽くかく、てのひらを置く、胸に抱きしめる、抱くといった行動は、普遍的な強壯性信号に含まれ、母子間の信号レパトリーに由来する。これらは気持ちをしずめる効果を持ち、親密な気分にする。」「一般に順位の高い者が低い者に保護と接触を与える。」と述べている。今回多く観察された幼児と中学生との接触行動も、幼児自身の気持ちをしずめ、安心感を得ることにつながっていることが考えられる。

また、接触行動時の幼児に喜びの表情が多く現れていたが、これは接触によって幼児が快感を感じていることを示している。この接触による快感はそれを生み出す行動にとって強力な強化子となる<sup>16)</sup>。中学生との交流時に、幼児は接触による快感が強化子となっておんぶ、抱っこ、肩車などの行動を要求したと考えられる。

通常時の保育士による絵本の読み聞かせ場面では、幼児は保育士の対面に座って話を聴いている。一方、交流時に中学生から絵本を読み聞かせてもらう場面では、幼児は中学生の膝の上に座ったり、後ろから背中に覆いかぶさったりしながら聴いている。しかも、その身体接触は幼児の方から積極的に行っている。幼児が中学生に対して「甘えたい」という気持ちを身体を

使って表現し、中学生がそれを受け入れ、さらに、幼児が「甘え」を受け入れてくれる中学生の存在を敏感に感じ取っていると見ることができる。本来、幼児は親に対して甘え行動としての身体接触を行い、快感を感じる。その快感を初めて出会った中学生からも体験し、その快感を求めて『接触遊び』を要求したのかもしれない。一方で、中学生も甘えてくる幼児を可愛く感じ、甘えさせてあげる快感を感じて、両者の間に心理的交互作用が成立したのかもしれない。

### 3. 機能遊びの意義

中学生との遊びで『接触遊び』とともに多くあげられたのが『機能遊び』である。『機能遊び』は手足や身体を動かすことによって楽しむ遊びである。ボールを蹴ったり、追いかけたり、フラフープで遊んだりする遊びが多く見られた。それらの遊びでは、幼児が中学生に対してボールをおつけたり、中学生を蹴ったり、追いかけたり、いたずらしたりする場面が多く、その場面で中学生は幼児のいたずらを上手くかわしていた。それが幼児には面白く、ますます幼児のやる気をかき立て、中学生に向かわせていたといえる。例えば、追っかけ遊びでは、走る速さを加減して、いかにも幼児に捕まりそうな状況にし、いざ捕まりそうになると急に素早く走り、幼児から逃れるということを繰り返し、幼児がくたびれてくると、捕まえさせるという行動が中学生に見られた。また、ボールをおつけられたときには、中学生は痛いという誇張した表情や行動をし、ボールをおつけ返すときには、いかにも強く投げるといふ行動をとりながら、ゆるく、やさしく投げ返すという行動を示した。幼児は通常時にはこのような遊びを経験することはほとんどない。素早く逃げる中学生を捕まえることができたことや、中学生から投げられたボールを上手く受けることができたことは、幼児には嬉しく、達成感を感じさせるものとなっている。それは、これらの遊びをしているときに幼児が喜びの表情を表出していることから示唆される。そして、このことは幼児の自己肯定感や自尊感情が育つきっかけとなり得る。

麻生<sup>17)</sup>は「子どもが「遊び」を知るのは、その子どもを相手にして周囲の大人（年長者）が遊んでくれるからです。……誰か「遊び」を知っている年長者がその子とたっぷり遊んでやればよいのです。「遊んでもらう」ということは「愛される」ことです。「遊び」とは、幼児に対する大人の「特殊な態度」＝「ある特殊な愛の形」だと言ってもよいかもしれません。子どもたちが可愛いから、大人は子どもたちを相手に「遊び」始めるのです。たくさん「愛される」＝「遊んでもらう」ことによって、初めて子どもたちは自分自身で「遊べる」存在に成長していくことができるのです。」と述べている。本研究において観察された中学生と幼児の遊びも、幼児が「遊んでもらう」＝「愛される」ことが成り立っており、これを経験した幼児たちはやがて成長し、遊んでもらう立場から遊んであげる立場へと転換していく。幼児たちにとっては貴重な経験といえる。

一方、この状況は、相手が幼児であることを意識した中学生の養護的な行動によって成り立つ。中学生や高校生にとってもこのように手加減して幼児の遊び相手になることは幼児を可愛く思える、嬉しいものであり、貴重な体験となっている<sup>5)</sup>。

また、幼児の協同遊びを相互的な意味の生成と共有という観点、つまりコミュニケーションの行為であるとみたとき、コミュニケーションが成立するか否かは、その遊びの文脈や状況を当事者同士が共有できる関係になっているかどうかで決まってくる。そして、子ども同士では了解不能なメッセージを大人が理解できること、あるいは、完全に理解できなくてもわかったという合図を送ることでその子どもと一時的なコミュニケーションが続くことはよくある<sup>18)</sup>。交流学習で、中学生は幼児の送るメッセージを一生懸命理解しようとして、幼児と関わっている。このような普段経験することがない心理的体験によって、生徒は人との関わり方の基本を学び、そのことは生徒自身の養護性の発達を促すことにつながる<sup>5)</sup>。そして、受け入れようという中学生の姿勢が幼児にも伝わるから、幼児はより自然に欲求を表出することができるのではないだろうか。

以上のことから、中学生との交流学習の実施によって、幼児の遊びが多様化し、『機能遊び』や『接触遊び』が増加した。そして、それらの中学生との遊びは、幼児に安心感を高めたり、自己肯定感をもたせることにつながり、幼児にとって人と関わる楽しさを学ぶ経験となっていることが示唆される。これらのことから、幼児と中学・高校生との交流学習は、今までに報告されてきた、中学・高校生への教育効果だけでなく、幼児への効果も期待できることが明らかとなった。

最後に、本研究をまとめるにあたりご協力いただいた山田 維さん、田中祐美子さん、神戸市教育委員会井上裕美子先生、春豊子先生、中学校、保育所の皆様に心から感謝いたします。

#### 引用文献

- 1) 大路雅子・松村京子. 高校生の幼児体験学習時の対児行動に関する研究 (第1報) — 特徴的対児行動 —. 日本家庭科教育学会誌 1998; 41(4) : 31-38.
- 2) 大路雅子・松村京子. 高校生の幼児体験学習時の対児行動に関する研究 (第2報) — 対児行動出現率と対児感情との関係 —. 日本家庭科教育学会誌 1998; 41(2) : 39-43.
- 3) 松村京子・大路雅子・山口香織. 幼児との交流時における高校生の対児行動 — 対児感情と性別による違い —. 小児保健研究 2002; 61 : 66-72.
- 4) 大路雅子・松村京子. 幼児体験学習時の中学生と高校生の対児行動. 小児保健研究 2002; 61 : 489-495.
- 5) 松村京子. 人とのかわり方を学び養護性を培う教育. 思春期学 2002; 20 : 14-19.
- 6) 清水凡生. 赤ちゃんふれあい体験学習の効果 — 1. 赤ちゃんふれあい体験学習の概要 — はしがきにかえて —. 小児保健研究 2000; 59 : 157-158.
- 7) 田中義人. 赤ちゃんふれあい体験学習の効果 — 3. 感想文からみた効果 —. 小児保健研究 2000; 59 : 163-165.
- 8) 谷村雅子. 子育て環境(1) — 生活時間からみた —. 母子保健情報1994; 29 : 16-21.
- 9) 山下俊郎. 幼児心理学. 東京: 朝倉書店, 1955 : 289-290.
- 10) Bowlby, J. 母子関係の理論 I 愛着行動 (黒田実郎・大羽 葵・岡田洋子訳). 東京: 岩崎学術出版社, 1969.
- 11) Bowlby, J. 母子関係の理論 II 分離不安 (黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子訳). 東京: 岩崎学術出版社, 1973.
- 12) Bowlby, J. 母子関係の理論 III 愛情喪失 (黒田実郎・吉田恒子・横浜恵三子, 訳). 東京: 岩崎学術出版社, 1980.
- 13) Harlow, H.F. The nature of love. American Psychologist 1958; 13 : 673-685.
- 14) 川村晴子. 子どもの育ちと遊び. 朱鷺書房, 1997.
- 15) Eibl-Eibesfeldt, I. ヒューマン・エソロジー — 人間行動の生物学. (日高敏隆監修, 桃木暁子他訳) 京都: ミネルヴァ書房, 2001.
- 16) Schlinger, H. D. Jr. 行動分析学から見た子どもの発達. (園山繁樹・根ヶ山俊介・山根正夫・大野裕史訳) 東京: 二瓶社, 1998.
- 17) 麻生 武. 「遊び」岡本夏木, 高橋恵子, 藤永保 (編), 講座 幼児の生活と教育 2 生活と文化. 東京: 岩波書店, 1994.
- 18) 佐藤公治. 対話の中の学びと成長. 東京: 金子書房, 1999 : 122-125.